

5 病原体以外の原因でおこる病気

農場でみられる子牛の病気には、実は思っている以上に多く非細菌性の（感染症でない）ものがあります。これらは、誤ったほ乳方法が原因でおこることの多い病気です。今いちど、ほ乳方法を見直してみませんか。

(1) 食餌性^じの下痢

病原体が原因ではなく、子牛がミルクをうまく消化できないことでおこる下痢です。多くの場合、不規則なほ乳方法（時間・量・濃度・温度）が原因となります。

[食餌性^じの下痢をおこさないために]

- ア ミルクは「定时、定量、定濃度、定温」で給与する
- イ ミルクの給与器具（ほ乳瓶とバケツなど）を頻繁に変えない
- ウ 代用乳は紙袋の裏面に表示されているメーカーの指定濃度を守る
- エ ミルク給与後30分程度は水をガブ飲みさせない
→ミルクが不足していたり、水を不断給与していない場合、ミルク給与直後に水を与えるとガブ飲みがおこりやすい
- オ 厳冬期は、冷水ではなくぬるま湯を与えるとよい（腹を冷やさないため）

【工夫事例】…これで下痢が激減しました！

(B農場)

- ☆代用乳とお湯の量を一度しっかり計量して、専用カップをつくる(写真21)
- ☆人の感覚は少しずつずれていくものなので、定期的に代用乳の計量を実施(半年～1年に1回)
- ☆お湯の温度も計測し、夏と冬で代用乳を作る時の温度を変えている(子牛の口に入る時に一定の温度になるようにする)

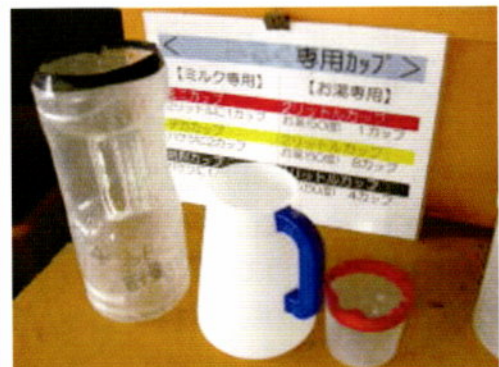


写真21 代用乳を測る専用カップを作り、定量・定濃度を守っている事例

(2) 誤嚥性^{ごえん}の肺炎

子牛が誤ってミルクを食道（胃）ではなく気管（肺）に入れてしまうことで起こる肺炎です。ほ乳中に子牛の口一気にミルクが入ってしまうことが原因であるため、ほ乳器具の使い方に工夫が必要となります。

[誤嚥さないために]

- ア 早く飲ませるために、ほ乳瓶の乳首の口をわざと広げない
→ほ乳瓶から出るミルクの量が多くなりすぎる

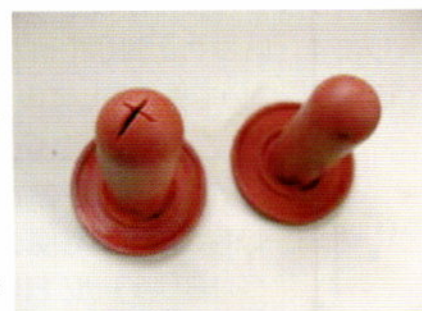


写真22 口の裂けた乳首(左)は誤嚥をまねく

イ わざと広げていない場合でも、古くなり亀裂が入る前に乳首を交換する(写真22)

ウ 口を広げるのではなく、空気穴を上手に使う

→ほ乳瓶には、乳首や本体に必ず空気穴が開いている
(写真23)

エ 空気穴が小さすぎる場合は、キリなどで少し広げる

オ 空気穴の近くに圧をかけながら（指で押しながら）給
与すると空気が入りやすい



写真23 乳首の空気穴

【工夫事例】・・・肺炎は怖い病気だから、手を抜かないようにしています！（C農場）

☆ 特に、ミルクの飲み方がまだ上手くない生後1週間くらいの時期に注意する

☆ 乳首は固めのもものと柔らかめのもの2種類を用意して、子牛に合わせて使用している
（上手に飲める子牛は柔らかめ→ミルクはたくさん出る（時間も早い）が大丈夫）

（下手な子牛は固め→時間はかかるがミルクがゆっくり出ることによって誤嚥をふせぐ）

☆ 空気穴の近くを指で押しと空気の入りが良くなる

おわりに

病気には原因があり、その原因を把握して対策をとることで必ず改善につながります。根室管内でも実際に改善に取り組み「子牛の下痢がほとんどなくなった」という事例も少なくありません。

病気になってからの対処は、牛にも人にもロスの多いことばかりです。病気はできる限り予防して、元気いっぱいの子牛を育てましょう！